
IS 《インフィニットストラトス》 転校先は女の園？

JOKER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス

IS 転校先は女の園？

【Nコード】

N5446V

【作者名】

JOKER

【あらすじ】

えーと、どうもJOKERですこれは二つ目なので掛け持ち出来るか不安です感想貰えたらうれしいのでよろしくお願いします

主人公は人間が嫌い、信じない、そんな主人公がISを動かしIS学園に入って、いつものISメンバーによって変わること出来るか、

これは2巻の転校シーンから始まります

プロローグ、主人公の過去（前書き）

変なスタートかもしれませんがよろしくお願いします

プロローグ、主人公の過去

此処は、何処だ？薄気味悪いな

「起きたか、No.582」

No.582？なんだそれ

「此処は何処だ！？」

「此処は研究所だよ」

研究所？

「何で俺が」

「君は売られたのだよ、君の親に」

え、嘘、だろ

「だから、君には実験体になってほしい、これは命令だよ」

「だ、誰がお前何かに従うか！！」

「黙れ！、貴様は黙って僕の言うことを聞けばいい！！」

反抗すれば鞭で叩かれる

「これを君の体に入れさせてもらう」

「な、く、来るな、やめろ、やめて、お願い、やめて」

俺は泣きながら言ったが

【ブスッ】

「うわああああああああああああ」

そこから俺は意識を手放した

「目覚めたか？No.582」

「俺に、なにをした」

「ただ注射しただけだよ、これで君は自由の身だ」

え！？

「ホントか」

「ああ本当だ」

俺は自由になった、つもりだった

俺は外に出て、少女が事故に遭いそうになっていた

「危ない！！」

俺は走った拍子に変な鎧に触った

その瞬間、俺はISを装備していた

「これなら間に合う」

俺はぎりぎりで少女を助けた

そこを見られ俺はIS学園に入ることになった

プロローグ、主人公の過去（後書き）

次回は主人公設定とIS設定を書きたいと思います

主人公設定

しいなひろき
椎名浩樹 16 歳

身長 170 cm

体重 45 kg

髪の毛の色は緑、長さは腰までであるがポニーテールにしている、顔は、フェアオーテイルのナツと同じ、目は白目の部分が黒、黒目の部分が赤、（プロローグにあった注射をされてなった）
体中には鞭で叩かれた時の傷が沢山ある
そのため人を信じずにいた

IS、IS名、静かなる者サイレント

武器はクロー、アサルトライフル、素手、槍、グレネード、薙刀

主なボディカラーは黒、サブカラーで黄色（黄色は腕に線として入っている）

待機モードは黒いマフラー

第一話 三人の転校生（前書き）

やっと始まりました

書くのは結構疲れます

第一話 三人の転校生

「面倒臭い」

「まあまあそう言わずに」

今俺が話しているのはフランスから来たシャルル・デュノア、女っぽい顔だ

「入るよ」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」
シャルルの自己紹介が終わると

「男子！！二人目の男子！！」

「もう一人いるしと同じクラス！！」

「美形！！守ってあげたくなる系の！！」

「もう一人はイケメン！！守ってもらいたくなる系の！！」
面倒臭いリアクションばかりだ

「あー、騒ぐな。静にしろ」

助かった、確か織村千冬、だったか

「み、皆さんお静に。まだ自己紹介、終わってませんよ」

山田先生、だったかな、すごい特徴がある

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

口開かず、か

「・・・・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官！？

「此処では織村先生と呼べ」
慣れてる

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

おわりかい

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

即答かよ、俺がやれやれとしていると

【バシンッ！】

は！？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
何やってんだこいつら

「落ち着け馬鹿ども、まだ終わっていないぞ」

「面倒臭いのでパスしていいですか？」

【バシンッ】

「いいわけあるか」

「わかりました、椎名浩樹、ISを動かしたから此処にいる、質問は御勝手に」

「じゃあ質問いいか」

質問してきたのはさっきラウラに叩かれた、

「織村一夏だ、質問は何で暑いのにマフラーしてんだ？」

「答えはこれが俺のISの待機モードだからだ」

俺が質問に答えると周りからなるほど声が聞こえた

「ではHRが終わる。すぐに着替え第二グラウンドに集合」

「織村一夏、何処で着替えるのだ？」

「とりあえず空いてるアリーナ更衣室で着替え、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

「了解」

俺達が移動していると

「転校生発見！！」

「しかも織村君と一緒に！！」

何処からともなく女子が現れた

「いたっ！こつちよ！」「者ども出会え出会えい！」

「……此処は武家屋敷なのか？」

ホラ貝でもなりそうな雰囲気だ

「織村君の黒髪もいいけど、金髪や緑髪もいいわね」

「しかも瞳はエメラルド」

「全て見透かすような瞳もいい」

「織村一夏、早く此処から逃げたい」

「何で皆騒いでるの？」

「男だから」

「そっか」

「ちなみに俺は織村一夏、一夏って呼んでくれ」

「よろしく一夏、僕もシャルルでいいよ」

「同じく、浩樹で構わない」

俺達は走りながら喋っていた、器用だな

「到着、時間がヤバイな、すぐに着替えちまおうぜ」

「お前ら着替え終わったか？」

「僕は終わったよ」

「何でお前ら着替えるの早いんだ」

「終わったな、よし行こうぜ」

俺達が走っていたら、一夏が馬鹿やっていた

「馬鹿やってないで早く行くぞ」

「遅い！」

「さっさと列に並べ」

俺は列に並ぶと周りをみた、女子のISスーツは水着みたいだった、それに比べ男子のISスーツは頭、手、ぐらいいしか露出していない、暑い

バシンツ、バシンツ

ふと、出席簿アタックの音がした、被害者は誰だ？

「今日は戦闘を実演してもらおう。鳳、オルコット」

キイイイン、ドゴオン

「おわ」

何かに一夏が巻き込まれた
それは山田先生だった

どうやら山田先生VS鳳&セシリアペア、でやるらしい
結果、鳳、セシリアペア、惨敗

「じゃ、やるか」

「椎名君イロイロ教えて」

俺と一夏とシャルルの所に全員集まってきた

「馬鹿者、順番はさっき言った通りだ次はもたつくなよ」

織村先生の一言で皆が移動した

周りからひそひそ声が聞こえた、ラウラの所は会話なし

なんだかんだで実習は終わった

【椎名浩樹今日の感想】
《疲れた》

第二話 真実（前書き）

投稿しました

うう、掛け持ちはきつい

第二話 真実

「さてと、飯でも食うか、屋上でいいか」

「ああ、椎名君発見！」

「げ、見つかった」

「椎名君一緒に学食食べよう」

「パンがあるから」

「ちえー、じゃあいずれね」

「さてと飯飯……ラッキー、誰もいない」

俺は屋上の柵によっかがってパン（ホットドッグ）を食べていると
「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

一夏とオルコットと篠ノ之とシャルルが来た

「お、浩樹じゃん、お前も飯か？」

「まあな……ふむ」

俺は周りを見て

「邪魔物は退散するよ（ニヤニヤ）」

「何笑ってんだよ、お前も一緒にどうだ？」

「遠慮しとくよ、独りが好きなんだ。それに、長生きしたいし」

「そうか……わかった無理に引き止めても悪いしな」

「すまない」

俺は、中庭のベンチでパンを食った

午後からの実習が終わり、寮に向かうが、

「俺の部屋、何処だ？」

「あ、椎名君、やっと見つけました」

「いかがいました？」

「その、部屋なんですが、女子と相部屋になりますがいいますか？」

一夏とシャルルが同室なのか、

「俺は屋上でいいです、女子と相部屋は辛いので」

「え、そうなんですか？、でも」

「本人がそう言っているのだそうしてやれ、ちなみに布団は寝袋でいいか？」

「構いません、ありがとうございます織村先生」

「コレが、寝袋だ」

「どうも」

さてと寝るか、

土曜日の午後

「なんで俺が此処に連れて来られたんだ？、昼寝したかったのに」

「でも、椎名君は、IS上手く操縦出来るの？」

「あの分厚い本何回も読んだし、独りで練習していたから大丈夫だ」
「ならいいけど」

「シャルル、着ずかい感謝

それにしても、あの、三人めちゃくちゃだな、篠ノ之はアバウト、
凰は罵倒しすぎ、オルコットは細か過ぎ、だな」

「まあそう言わずに」

「一夏のISは後付武装がないんだよね？」

後付武装、か、俺のはどうだろうか

「そのかわり、ワンオフ・アビリティがファーストの状態で見える、と」

「ああそうだ」

なかなか便利だな

「姉弟だから同じって訳ではないだろうし、謎だな」

「そうそう、俺は、自分の技を見られたくないからたちさるわ」
「わかった」

ガシユ

職員室

「織村先生、ちょっと話があります」

「なんだ椎名、手短に話せ」

「わかりました、もうすぐ学年別トーナメントがありますよね」

「確かにあるな、あれはペアで戦うのだぞ」

「知っています、それで、俺を単体で出場させて下さい」

その台詞に職員室がどよめいた

「本気が椎名、一人では勝てないぞ」

「本気です、俺は、合わせるのが苦手ですから」

「わかった、単体での出場を許可する」

「ありがとうございます」

トーナメントが楽しみだ

夜

暇だ、せっかくだ一夏の部屋でも行くかな

一夏の部屋の前

『いいけど……本当にどうしたの?』

中から、シャルルの声が聞こえた

『俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから』

一夏にそんな過去が

「俺は、家族に売られた」

「「誰」」

俺はドアを開けながら俺の過去も言ったそしたら一夏とシャルルが同時にこつちをみた……ってあれ?

「シャルル……だよね?」

「う、うん」

「すまない、タイミングを間違えたな」

「あ、別に気にしないで」

「一夏、これは？」

「一体何があった」

「実はな―事情説明中―とゆっわけなんだ」

自分の子供を道具感覚で使う・・・か、ふざけんな！！

「とりあえず、シャルルはどうすんだ、これから」

「多分、国に呼び戻されて、政府にばれ、牢屋生活かな」

「そうか・・・どうすれば、そうだ」

「・・・だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

これは、このタイミングにはちょうどいい

「つまり、お前は三年間、安全に暮らせる、この学園でな」

「一夏、浩樹、ありがとう」

「でも、よく覚えていたね。特記事項って五十五もあるのに」

「・・・勤勉なんだよ、俺は」

「小説感覚で読んでたからな」

「そうなんだ。ふふっ」

俺はシャルルの頭に手を置いて

「いい顔で笑えるじゃん」

シャルルの笑顔はまさに十五歳の女子そのものだった

「まあ最終的に決めるのは、お前なんだしっかり、かんがえな」

「うん、そうする」

「とりあえず、俺は寝る、じゃあな」

俺が出ようとするとシャルルが声をかけてきた

「浩樹って部屋何処？」

「え、ああ、屋上」

「え！？」

二人して驚いていた

「ああ、後俺、トーナメント、一人で出場する」

「え!?!」

二度だ

「とりあえずじゃあな」

俺は一夏の部屋を後にして屋上に向かった

「寝よ」

この時、俺はまさか明日、あんなネタをだされていたとは思ってもしなかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5446v/>

IS《インフィニットストラトス》 転校先は女の園？

2011年10月9日12時02分発行